

私と京都

文||ベニシア・スタンリー・スミス
Venetia Stanley-Smith

画||浅妻健司

1971年4月11日、台湾発のフェリーは大きな火山の桜島に近づき、やがて鹿児島港に着きました。そのとき私は20歳。前年の9月上旬に英国から旅立った私は、ガンジス川上流の聖地ハリドワールにあるアシュラム（瞑想道場）で、数ヶ月間、瞑想中心の生活を送りました。そして次は日本へ向かうことにしたのです。

私は日本に親近感を持っていました。母の実家ケドルストン・ホールで、子供の頃から日本の古い工芸品や写真などを見ていたからでしょうか。私の曾祖父の兄ジョージ・カーゾンがインド総督兼副王や英国の外務大臣などを務めた政治家です。明治時代に2回、日本を訪れ京都へも足を運んでいます。カーゾンが撮影した日本の写真が、幼い私の記憶の片隅に焼き付いたのかもしれない。

鹿児島港から町に出た私は、日本人が和服を着ていないことにまず驚きました。旅の途中で仕入れた「Eugensudo」という情報だけを頼りに、東京へ行こうと決めていました。その頃、風月堂はカウンター・カルチャーの拠点となる銀座の喫茶店でした。そこへ行きたいのにお金がありません。ならばヒッチハイクするしかない。

道路沿いで親指を上げていると一台のトラック

します。「ああ、逮捕されるかも……」。パトカーはジャングルのように交差した高架道路をしばらく走りました。高速道路の入り口でパトカーは停まり、巡査は私に待つように言って車を降りました。この人はいったい何をしようとしているのだろう……。しばらくして「東京、OK!」と喜びに満ちた顔。巡査は東京に向かうトラックを探してくれました。

次のトラック運転手は、少し英語を話しました。しばらく運転したあと、「お腹すいたか?」と訊いてくれました。そのとき私は1日以上何も食べていませんでした。食堂で彼は、私のために親子どんぶりを頼んでくれました。今でも忘れられない日本食のひとつとなっています。やがて暗くなり、私がウトウトしていたので運転手は後ろの寝台で横になるよう勧められました。この人を信用していいのだろうかと不安がありましたが、疲れていた私は寝台を使わせてもらうことにしました。あまりの狭さと、壁のスクリーン写真に驚きつつ、私はお祈りをして眠りにつきました。トラックは夜通し走ったのでしょうか。「風月堂!」と言って、私を起こす運転手の笑顔がありました。

風月堂がオープンするまでしばらく待ったあとで、パツハが流れる店内に入りました。長髪のアメリカーらしい青年が英字新聞を読んでいたの、話しかけてみました。私が途方に暮れている様子がわかったのでしょうか。私が無一文だと言うと、彼は親切にもいくらかお金を貸してくれて、新宿

が停まりました。助手席に乗り込むと、インドの流行歌と中国の民謡を混ぜたような、これまでに聴いたことのない音楽がラジオから流れています。初めて聴いた演歌に、私は異国情緒を感じました。トラックから窓越しに見える家々には、大きな布で作られた色とりどりの鯉が風になびいていました。それが何なのか知りたいと思いましたが、英語を話さない運転手さんと会話ができません。平野はすべて田畑として開かれており、その美しさに私の心は和みました。翌朝、真っ青な空の下で朝露に輝く桜の花たちが、美しく印象的でした。やがて、たくさんの煙突がある工場地帯に入り、これが本当の日本の姿なのかと思いました。「大阪です」とトラックは橋の横に停まりました。お礼を言っていると私は運転手と別れました。

自分がどこにいるのかわからないまま、私は川沿いを歩きました。ふと見ると交番があります。「コンニチハ! 英語できますか?」と声をかけると、「ノー!」と巡査は手を左右に振りました。「東京?」と訊くと、首を振りながら、「東京、あっち、あっち」と指さして、「新幹線、新幹線」と言いました。私が「ノー・マネー」と言って出ようとすると、彼はパトカーを指さして乗るように手招き

の安宿の場所を教えてくださいました。

チャールズというその青年は京都に住んでいると言いました。京都の美しい山、川、神社仏閣の話などを彼から聞くうちに、まさに私が思い描いていた日本ではないかと嬉しくなりました。「じゃあ、また京都で!」と彼は連絡先のメモを私にくれて立ち去りました。

しばらく私は東京でアルバイトをして生活資金を貯めました。そして梅雨が終わる頃、京都市きの夜行バスに乗り込みました。

翌朝、御池大橋の近くにバスは停まりました。やがて朝日が顔を出し、鴨川の方こうに見える京都・北山の山並みは、黄金色に包まれました。川沿いに次の橋まで歩いてみました。たくさんの鳥たちが川岸でくつろぎ、並木道の木陰では涼しい風が吹き渡っていました。

偶然にもその日は祇園祭の宵山の日でした。午後になると通りでは、髪を結びあげた美しい着物姿の女性たちが、蝶が舞うように歩いていました。心優しい人々、繊細な文化を持つ日本に着いて感動する日々の連続でした。そして、この京都の地で、さらに私は日本に魅了されていくのです。

ベニシア・スタンリー・スミス ハープ研究家。イギリス貴族の館で知られるケドルストンに生まれる。1971年に来日し、78年より京都で英会話学校を始める。96年に京都・大原にある築100年の古民家移住をきっかけにハーブ栽培やハーブを使った生活を始める。著書多数。NHK番組『猫のしっぽ カエルの手』にレギュラー出演中。

